

# 「ピー」される「日本」

アジアの海賊版から

<1>

山田 奨治

二〇〇四年三月のことだった。台湾・台北の繁華街を歩いていて、ある光景に出くわした。ビデオカメラを構えた人が、背丈ほどあるパネルを通行人にみせながら、インタビューをしている。どうやらテレビ番組の収録のようだ。

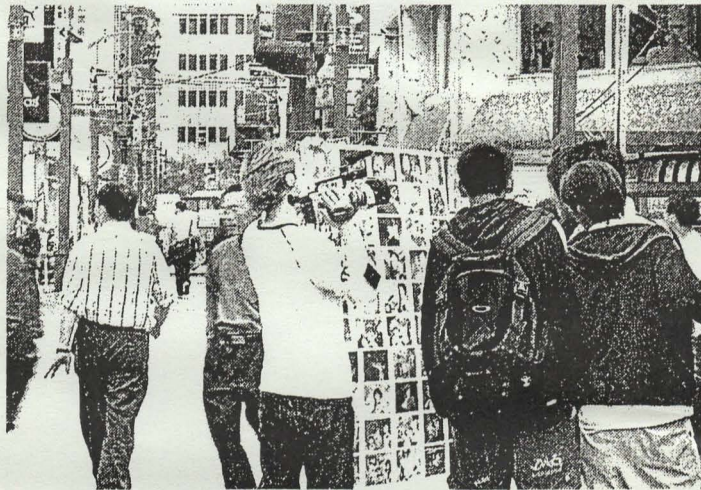
パネルにはアニメの「コマが、たぐさんははられてあつた。すべて日本のアニメだ。」「休さん」「アタックN.O.1」「キテレツ大百科」「クレヨンしんちゃん」「銀河鉄道999」「タイガーマスク」「ドラえもん」「ひみつのアッコちゃん」「あらいぐまラスカル」……。一九七〇年代から現代のものまで、時代はさま

## 発信基地



やまだ・しょうじ氏  
1963年大阪府生まれ。筑波大学院修士課程修了。筑波技術短大助手を経て96年から現職。著書に「禪」という名の日本丸」「日本文化の模倣と創造など」など。

さまだった。インタビューの様子から、台湾の人々は、日本のアニメによくなじんでいると感じた。日本では「なつかしの名作」の類になる作品も、じつによく知っている。



日本のアニメがあふれている台北の繁華街。インタビュー取材していた日本のテレビ局（筆者撮影）

## 「自主努力」で広がる台湾

日本に帰って二週間ほどたったころ、台北でみたインタビューがテレビに映っているのを、偶然みつけた。あれは、日本の番組の収録

マンガやアニメは、世界に誇る日本の文化だという人が増えた。マンガやアニメなどのコンテンツ産業を育成し、日本のソフト・パワーとして戦略的に活用していくこと、政府も躍起になっている。

コンテンツ産業振興策の柱のひとつが、海外での海賊版の取り締まりだ。日本製アニメのDVDの海賊版が、アジア圏でたいへんな広がりを見せている。それを放置したままだと、日本の権利者に入るべき利益が失われるという。

なるほど、そうかもしれない。しかしちょっと立ち止まって、考えてみよう。台湾の人々が、日本の古いアニメのことまでよく知っているのは、いったいどうしてなのだろうか。

ひとつひとつの作品が、どのような形で台湾に入ったのかまでは、わからない。しかし、「休さん」「クレヨンしんちゃん」「ドラえもん」についていえば、安い海賊版のおかげで台湾に広まったことは間違いない。大事なことは、日本の制作サイドが、これらのアニメを積極的に売り込んでいたとは、とっくに思えないことだ。

つまりこういうことだ。日本のアニメは、ときに海賊版という形を取りながら、台湾の人々の「自主努力」で広がった。日本は、そうやって出来上がった市場を奪おうとしている。アニメだけではない。テレビドラマや映画など日本製コンテンツの海賊版の多くが台湾で製造され、中国本土や香港に流れている。台湾は、日本文化のひそかな発信基地になっている。

考えてみれば皮肉なことだ。戦前・戦中を通して日本が台湾の人々に苦難を与えた一方で、当地の若者は日本の大衆文化を求めてきた。台北には日本語の看板があふれているし、日本で流行のファッションに身を包む若者も多い。日本国籍をもつ私たちは、こういった現象にどう向き合えばいいのだろうか。それをこれから考えていきたい。

（国際日本文化研究センター 助教 山田 奨治）